

國學院大學學術情報リポジトリ

〈研究会記録〉平成二十九年度共存学公開研究会「復興・伝統文化と地域の自立性」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001046

〈研究会記録〉

平成二十九年 度共存学公開研究会

「復興・伝統文化と地域の自立性」

平成二十九年度共存学公開研究会「復興・伝統文化と地域の自立性」は、平成三十年二月二十三日、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」共存学グループの主催で開催された。本記録は、当日の個別報告・コメント・総合討議の内容を基に、加筆・修正を加え、編集したものである。研究会開催の趣旨は、東日本大震災・熊本地震等の被災地における伝統文化の役割を考えるとともに、伝統文化が「地域の自立性」とどのように関わるのかを検討することにあつた。

当日は、個別報告として、津波記念碑などに関わる地域の様々な伝承の事例（個別報告二）、平成二十八年の熊本地震発生後の状況とグリーンインフラ（個別報告二）、宮城県石巻市の大室南部神楽の事例（個別報告三）がそれぞれ報告された後、コメントを交えて総合討議が行われた。討議においては、被災地の様々な事例を基に、伝統文化と「地域の自立性」をテーマとする議論が為され、各被災地の相違点や防災意識と地域伝承の関係性、地域における様々な主体の問題、地域社会と個人の自立の関係性等、今後考えるべき被災地復興における諸課題について、具体的かつ有益な議論が展開された。

なお、この研究会を開催する契機は、共存学シンポジウム「復興・伝統文化・ネットワーク―東日本大震災から七年目の今―」において、震災復興における伝統文化の役割や、それに伴う人びとのネットワークを焦点として、被災地復興の核となる神社やキーパーソンの存在、次世代への継承、人びとの心と伝統文化の関係など、様々な課題が提示される中で、特に今後の復興において、「地域の自立性」が重要となることが課題として議論されたことにある（國學院大學研究開発推進センター共存学グループ編『共存学ブックレット2 復興・伝統文化・ネットワーク―東日本大震災から七年目の今―』平成三十年参照）。

いうまでもなく、被災地の多種多様な事例を全て網羅することは困難であるが、本研究会においては、具体的な事例を通して、被災地の暮らし・コミュニティ・文化のあり方を考えるときともに、様々な自然災害に対する防災を今後どう考えていくべきかという視点等、改めて検討すべき幾つかの論点が提示された。今後の被災地復興における伝統文化と「地域の自立性」を考える際の縁になることを願い、企画・開催した本研究会の記録を是非ご一読頂きたい。

なお、本記録を掲載するにあたっては、登壇者の皆様から加筆・修正を頂くなど、研究会に加えてのお願いに感謝頂いた。この場を借りて深く御礼申し上げたい。

◇公開研究会記録（所属・肩書は開催当時、敬称略）

平成二十九年度共存学公開研究会「復興・伝統文化と地域の自立性」

主催 國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」共存学グループ

共催 基盤研究 (C) 「災害・復興と伝統文化の役割に関する学際的研究」(研究代表者…古沢広祐 課題番号

一七 K 一二六二〇)

日時 平成三十年二月二十三日(金) 十四時〜十七時三十分

場所 國學院大學渋谷キャンパス一号館一〇一教室

・個別報告一〓齋藤平(皇學館大学文学部教授)

「地域で伝えるということ」

・個別報告二〓藤田直子(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

「熊本地震の実態調査と南海トラフ巨大地震津波の避難分析に基づく地域の自立性と復興への指針」

・個別報告三〓筒井裕(帝京大学文学部准教授)

「被災地の人々の力強さの源―漁村でのフィールドワークから―」

・コメント一〓滝澤克彦(長崎大学多文化社会学部准教授)

・コメント二〓阿部晃成(雄勝町の雄勝地区を考える会事務局)

・総合討議 司会〓古沢広祐(國學院大學経済学部教授)

※本記録の編集作業は、宮本蒼士(研究開発推進センター准教授)、高橋雄一(同センター研究補助員)、小山田江津子(同センター臨時雇員)の三名が担当した。